

---

# **番外編 天空の恋愛～晴れ時々曇～**

美空 柚姫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

番外編 天空の恋愛～晴れ時々曇～

### 【NZコード】

N8563Y

### 【作者名】

美空 柚姫

### 【あらすじ】

天空の恋愛～晴れ時々曇～

出てくる人物の出逢い～恋愛心を人物目線から書いてみました。  
是非読んで下さい。

## シンセの戀い（前書き）

シンセの恋愛に対する考え方、不安などなど  
幼馴染のダグエルと会話を楽しむ

## シンセの想い

自宅のベランダから  
学園の出入口が眺められる。

沢山の見習い天使が下校しているのを見ながら考え方をしている。

私は卒業して数年しかまだ経っていない。

学園では恋愛をしていない。

告白はされたが…

いまいち、胸がときめく子が居なかつたのもあるが…

私の父上は主天使を統括している職務に付いている。

私は、跡継ぎで期待されている…

以前からファインセの話を聞かされている。

だから、学園で想い人が出来たら悲しませる事になる。

…ただ、想い人が出来て…

父上に紹介すれば良い話だろうが

…自分に自信が無いだけだ。

そんな、考えを何時もしている…

気付けば、幼なじみのダグエルが横に居た。

「女探しか？」と笑っている。

私は笑った。

「考え事をしていたのだよ」

ダグエルは学園で人気だったが

恋愛はめんどくさいと何時も言つていた。

「ダグエルこそ、行動すれば想い人ができるんじゃないかな？」

ダグエルは笑い返してきた。

「俺は一生に一度だけ恋がしたいのだ。今の所…出逢っていないな。シンセは父上の言いなりか？」

学園を見ながら

「相手が良ければな…」

溜め息が出る。

羽と正装がピンクの見習い天使の子だ…（前書き）

シンセが初めて、アムエルを見かけた時の事です。  
シンセはアムエルを自然に目で追いかけてしまう。

羽と正装がピンクの見習い天使の子だ…

ダグエルが指差して

「羽と正装がピンク色の子だ。選ばれし者か…可哀想な運命だな…」

その子をみると…

笑顔が可愛い…

爽やかな子だ。

髪の毛も腰まで伸びていて、

触りたい…

私は自然に、その子を田で追いかけていた。

ダグエルは

「その子と腕を組んでいる子が可愛いな…」  
横を見ると、明るく元気な子だ。

私は笑いながら

「ダグエルの好みか?」

ダグエルは笑いながら

「好みだ。年下だから可愛いがれるだろ?」

一人で眺めていると

薔薇園の花畠に座った。

ダグエルが

「あ、あの一人…シンセの居場所に座つた」

学園の近くの薔薇園に花畠がある。

私はよくそこに座り

将来の事を考えている。

ダグエルが

「薔薇園に行かないか？今日の修行終わつたし…あの子を近くから見たい」

私は笑つて、ダグエルに着いていく。

ダグエルは薔薇を見ながら一人を眺めている。

こんなダグエルを見たのは初めてだ。

私は微笑んでいた。

私は薔薇を見つめていると

ダグエルが

「あの二人、居眠りしだした！後ろから驚かさないか？」

私は笑い

「可哀想だろ？」

私はピンクの羽をした子を見つめていた。

寝顔も可愛いな…

正直、私もダグエルと驚かせたい。

## 胸がドキドキする（前書き）

アムエルと視線が合ひ、  
目が透き通つていて、笑顔が可愛いアムエルにシンセの胸はドキドキしてしまふ。

## 胸がドキドキする

ダグエルは一人で一人の元に向かつた。

私は笑いながら後を着いていく。

ダグエルは一人の肩に手を置き

「お嬢さん達？此処で寝たら風邪を引くぞ？」

二人は驚いて、ダグエルを見つめていた。

ダグエルの狙いの子は、ダグエルを見て笑っていた。  
ピンクの羽の子は…ダグエルに向かって

「もう！後少しど、王子様に逢えそうだったのに！もう一回眠れば  
…出逢えるかも…」

ダグエルは

「夢か？」と聞いている。

その子は素直に頷いていた。

私は微笑んでしまった。

ダグエルは

「どんな、王子様だつた？」

彼女は

「長髪の綺麗な銀色で、優しい笑顔をしていましたよ

肩を落としている。

ダグエルの狙つている子は

「私は勉強疲れで、夢なんか見なかつたわ」

笑つてダグエルを見ている。

「私はダグエルだ。仲良くしてくれないか？」

彼女と握手をしている。

「私はミルエルです。天使学園の大学三年！」

ダグエルがあんなに笑顔だ。  
完全に惚れたな…

羽のピンクの子が

「私とは、握手して頂けないのですね？」と不機嫌にしている。

私は見ていて笑ってしまった。

ダグエルは彼女に

「握手相手はこっちにいる」と私を指差した。

彼女と視線が合い

彼女の目は綺麗に透き通っている。

私の胸がドキドキした。

こんな感じは初めてだ。

彼女は笑顔で手を差し伸べた。

とりあえず、自然に振る舞おう。

彼女は

「初めてまして、アムエルです。ミルエルと同じ天使大学三年です」

彼女の笑顔は素敵だ。

私は彼女の横に座り

「私はシンセだ。宜しく」

彼女は手を離さなかつた。

私を見つめて  
首を傾げている…

「夢の王子様にそっくり…長髪の銀色で、笑顔が優しい」

私はそんなセリフを言われた事が無い。

この子は素直な子なのか？

それとも、誰にでも言うのか？

ダグエルが

「アムエル？シンセは高等部の時から人気だった。ファンクラブもあつた」

アムエルは驚いて手を離し

「すいません。思つた事をつい口に…ファンクラブですか？凄い人氣だったのですね！お相手が居たら失礼な事をしてしまいました」と私に頭を下げた。

私は手を離されて  
少し残念な気分になつた。

「この子が私の妃アンセなのか?」(前書き)

ダグエルはミルエルを連れて、薔薇を見に行ってしまった。

アムエルの素直な性格に惹かれながらも

話を聞いていると、自分の妃アンセなのか?と疑問に想つてくる。

「この子が私の妃アンセなのか？」

ダグエルはミルエルを連れて薔薇園を歩いていた。  
いつの間にか、二人になっていた。

無言の沈黙が流れる…

アムエルが喋りだし

「薔薇はいつも綺麗ですよね。精一杯生きていますわ」と私に笑顔で話をする。

私はおもわず

「アムエルは学園で、想い人はいるのか？」

アムエルは顔を横に振り

「見ての通り、私はピンク色に染まっています。将来を期待されています。それ目的の方ばかりで、私の心を見て下さる方がいないのです。それに、ある方から息子の嫁にと言われています」

彼女は悲しい顔をしていた。

「相手には会つた事は？」

アムエルは顔を横に振り

「会つた事は無いのです。そのお方は主天使を総括していらっしゃるそうで…私の将来を息子と過ごして欲しいそうです。でも、そのお方は私の事をとても大事にしてくれています」

私は父上だと思った。

彼女が？将来の妃アンセなのか？  
考えていると

アムエルが私の顔を覗き込み

「でも…シンセ様を見ていると…胸がドキドキします。こんな感情は初めてですわ…」と笑っている。

私は素直に嬉しかった。

可愛く思い、アムエルの頭を撫でた。

アムエルは

「私も、シンセ様のファンになつても良いですか？」

私は嬉しく思い

「歓迎だよ。また此処で逢えるか？」

アムエルは頷き

「私、ずっと一人で暮らしているので、今日から幸せに眠れそうですね」

私は首を傾げ

「両親は？」

アムエルは笑顔で

「両親は私のため戦ったのです。誇りに思います。どなたかわかりませんが、悲しいとは思っていません。私が幸せに暮らせば良いのですから」

私はアムエルが素直な子なのだとthought。

日が暮れそうになり

アムエルに家に帰りなさい。と言つた。

アムエルは

「また、必ずお会いしましょうー」と家に帰つて行つた。

これが恋い…

部屋に戻つてからも  
アムエルの笑顔が忘れられない。  
この胸のドキドキはなんだ?  
締め付けられる想いは…

ダグエルが戻り

ミルエルとの楽しい話をしたと話している。

ダグエルに聞いた

「アムエルと話していると、胸が締め付けられてドキドキするのだ。  
これはなんだ?」

ダグエルは笑い

「恋だよ恋。シンセがやつと恋をしたか」と笑う。

「ダグエルは?」

ダグエルは笑いながら

「気に入った。また会う約束もした」

夜になり、いつも読書をしている。  
いつも通りに読書が進まない。

恋とはこんなに厄介な物なのか?

しかし、アムエルの笑顔を考えていると幸せだ。  
アムエルが父上の言つフイアンセなら幸せだ。

しかし、違つたらどうする  
といつあるず、今を楽しむ。

## すっかり惚れた

今日も、ベランダから学園の出入り口を眺めていた。

アムエルはまだか…？

すっかり、アムエルに恋をしたようだ。

アムエルが出てきた。

今日は一人か…

すると、後ろからアムエルが男に話しかけられている。

アムエルは人気なのか。

まさか、アムエルは誰にあの笑顔を見ているとアムエルは手を合わせて謝っている。

ふと、アムエルがこちらを見た。

ん？目があつたか？

アムエルが此方に向かつてきた  
見ていたのがバレてしまつた。

アムエルは近くまで歩いてきた。

笑顔で

「シンセ様？そこからの眺めが好きなのですか？」

アムエルは笑顔だ。

「見てみたいか？」

アムエルは

「是非！」と喜んでいる。

「そちらに行くから、待つていなさい」

アムエルが私に笑顔を見てくれる。  
幸せだ。

玄関を開けると、笑顔のアムエルが待っていた。

ファンか…

…可愛い

…抱きつきたい

すると、アムエルが私の腕に抱きついてきた。  
「シンセ様？会いたかったです」

私は嬉しかった。

「アムエル？何故、抱きついてきた？」

アムエルは

「いつも、寝る前に読書をするのですが…シンセ様の笑顔が忘れられない…早く会いたいと思っていたのです」

嬉しく話すアムエルを見ていると、幸せだ。

ベランダから眺めを見ると

「此処から、大学の出入口が見えますね。シンセ様は、何歳なのですか？」

私は笑い

「気になるか？」

アムエルは

「だって、シンセ様のファンですから！」  
「28だよ。ファンか…」

私の内心は、ファンじゃなく  
私だけのアムエルになつて欲しい…

他の男なんか見てほしくない。

「ファンのアムエルは、シンセをどう思っているのか？」

アムエルは突然の質問で困っている様子だ。

「ファンはシンセ様の一番近くに居たいですわ」

アムエルは恥ずかしそうにしている。

私も嬉しい。

楽しく会話をしていた。

## どんな関係？

日が暮れそうになり、階段を降りながら話をしていた。

シンセ様の母上に

「あれ？シンセのお友達かしら？」

アムエルは頭を下げ

「シンセ様には仲良くして頂いています」と笑顔だ。

シンセ様の母上は

「…まさか、シンセの彼女？」

私は、アムエルを彼女と言いたがつた。

アムエルは私の目を見てきた。

「2人の秘密ね！名前は？」

2人の秘密か…

アムエルも彼女にしてほしいのか？

アムエルは

「アムエルです。宜しくお願ひします」

玄関を出て、話をしていると

父上が帰られた。

アムエルは驚き

「ムドラー様…」と頭を下げている。

ムドラー様は笑顔でアムエルを抱きしめた。

「シンセと知り合いなのかな？」

アムエルは、恐る恐る頷いている。

父上は笑顔で

「なら、話は早いな。この間の相手はシンセだ。まあ、アムエルが卒業してからの話だが」と家に入つて行つた。

アムエルは固まっていた。

## 思った通り

まずい…

何て話せば…

「アムエル? 話とはなんだ?」

アムエルは、作り笑顔で

「まさか、ムドラー様の息子様がシンセ様だなんて… 胸がドキドキして… 私が相手なんてシンセ様が嫌がりますわ」

頭を下げる帰つて行つた。

私は、相手がアムエルなら最高な気分だ。  
嫌なわけがない…

その夜に、父上からアムエルがフュアンセだと聞いた。  
複雑な気持ちだ。

素直に喜ぶべきだらう…

しかし、アムエルとは恋愛をしたい。  
アムエルが私を本気で好きになつて欲しい。

どうすれば…

次の日からはアムエルとは会つていない。

見てはいるが…

花畠でアムエルが一人で考え込んでいる。

「あ、あ、ここに歸属する

やはつ、アムエルは可憐にな

しかし、どうせ話が

## 告白

その時、後ろからダグエルが話しかけてきた。

「アムエルの観察か？」

ダグエルに一連の話をし、どうするべきか聞いてみた。

「居眠りしているのだ。後ろから抱き付けば良い」

ダグエルは何を言っているのだ…

そんな事、何度も考えた。

ダグエルは私の背中を押した…

ゆっくり、アムエルの近くに行き  
後ろから抱き締めた。

私は胸が張り裂けそうだ。

案の定、アムエルは驚いて起きた。

「シンセ様…」

とりあえず、何か話そう。

アムエルを抱きしめながら、耳元で話をする。

「アムエル？ ファンが会いに来ないと寂しいぞ？ あの日に、父上からアムエルがフィアンセだと聞いた。驚いたし、嬉しくもあった。だが、私はフィアンセとしてアムエルを受け入れる前に…想い人として、私を好きになつて欲しい。勿論、私はアムエルが好きだ。ア

ムエルは私をどう思っている?「

私は自分で恥ずかしい事を言ってしまった。

アムエルが私の手を握った。

何を言われるか不安だ。

## 結ばれた気持ち

「シンセ様が…私を…好きなのですか？」

アムエルも考えているようだ。

「初めて見かけた時から、惹かれていた。それが恋心だと気づいた」

アムエルは涙目で見つめてくる

「私がフィアンセでも良いのですか？」

私は嬉しい

「アムエルがフィアンセなら、心から嬉しい」と囁つと、

アムエルが泣き出した。

「シンセ様が好きです。自信がなくて…」

私の胸がズキズキ痛い。

「アムエル…好きだ。近くに居てくれるか？」と抱きしめた。

「シンセ様の近くに居させて頂きたいです」

私は強くアムエルを抱きしめた。

見つめて楽しいのか？

それから、私とアムエルはよく逢う様になった。  
花畠で話すのも楽しいが  
私の部屋でアムエルの勉強を教えていた。

アムエルに勉強を教えている最中に私を見つめている。  
そんなに私を見つめて何が良いのだ？

私もアムエルを見つめる。  
アムエルのペンの手は止まっている。

アムエルの目は綺麗だ…

思わず、アムエルの頬を触る。

「アムエル？」

アムエルは驚きながら、勉強を再開した。

アムエルの頬は赤く染まっている

…アムエルは何を考えていたのだ？

アムエルが

「少し、休憩！」と私に抱き付いてきた。

私は笑った。

アムエルは

「少し、元気を蓄えないと…」

「アムエル？ 何故、私を見つめる？」

アムエルは驚きながら

「別に、何かを求めているわけではないのですよ？シンセ様が素敵で見とれてしまいました…」

アムエルの驚き様に可愛くも思つたが

何かを求めているのか？

：何を求めているのだ？

後でダグエルに聞いてみるか。

アムエルの宿題が終わり

「教えてくれてありがとうございます」と私に頭を下げている

思えば、恋人同士だった

笑顔が可愛い…

抱きしめたい…

…ん?

アムエルが帰る支度をしている。

「アムエル?」

振り返り

「シンセ様?」

何を話したら良いのか分からず笑ってしまった。

アムエルは首を傾げている。

私はアムエルの頭を撫でた。

アムエルは笑った。

ダグエルが部屋に来た。

アムエルは

「私はこれで…」と帰つて行つた。

ダグエルは

「邪魔したな」と笑つている。

「いや? 丁度、帰る所だから」

「ダグエル? アムエルに勉強を教えている時に、私を見つめてくるのだ。ペンを持つ手も止まって、私もアムエルを見つめてしまうが…アムエルは何を求めているのか分かるか?」

ダグエルは笑っている。

「何をそんなに笑うのだ？ 真剣に聞いているつもりだが」

ダグエルは笑顔で

「シンセに見とれているのか、ある事を期待している」

…ある事？

「期待？ それは、ミルエルも同じか？」

ダグエルは腕を組んで

「私は勉強終わったら、抱き締めて二人で話している。離れたくないからな」

…抱きしめるか…

「見つめ合っているなら、キスをすれば良い」

「キス？！」

「シンセは鈍感だな。私にキスをしてくださいって事じゃないか？」

…考えていなかつた。

…確かに、アムエルとは恋人同士だ。

…そうゆうこともあるのか

## 親友に教わる恋愛

「アムエルを見つめていて、キスをしたくないか？」

「頬は触つてしまつたが…」

ダグエルはため息をついて

「奥手だな。恋人同士ならキス以上も出来るのだぞ?」と笑う

：キス以上？！

「それは、結婚してからだろ？」

「あれ？シンセ…恥ずかしいのか？」と笑われた。

「それを言うなら、ダグエルはどうなのだ？」

ダグエルは笑いながら

「私は私なりに可愛がっているよ？」

：ダグエルもミルエルとキスをしているのか？

「まさかキスも…？」

ダグエルは笑つた。

私は笑い、ダグエルに訪ねた

「答える！」

ダグエルは恥ずかしそうにしながら

「そんなにムキになるなよ。私もまだしてないよ

私達は笑い

「お互い…奥手だな」

ダグエルは

「向こうからしてきたら、驚きだな」と笑う。

今日もアムエルは私の部屋で宿題をしている。

私は横でわからない問題を教えるだけだ。  
それだけでも、二人の空間が出来て幸せだ。

… 気付いたら寝ていた。

私の唇に良い香りの何かが触れた。

目を開けると、アムエルが驚いて勉強の続きをしている。

… ん？

アムエルは今何をした？

「アムエル？」

アムエルはこちらを振り返らず

「何ですか？ シンセ様」

… ?

「今、何をした？」

アムエルのペンが止まった。

「シンセ様の寝顔が素敵だつたので… つい」と苦笑いしている。

私は首を傾げ

「つい？ 何を？」

アムエルは言葉を濁しながら

「えつと… いうゆう事です」

と私にキスをした。

私は驚いた。

まさか、アムエルがしてくるなんて…

「他の人に取られたくありませんから…」

… 可愛い。

私はアムエルを抱きしめて

「アムエルは可愛いな。私もアムエルを取られたくないからキスをしてても良いと言うことなのかな？」

アムエルは恥ずかしそうにしている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8563y/>

番外編 天空の恋愛～晴れ時々曇～

2011年11月30日11時53分発行